

令和6年度
全国中学生人権作文コンテスト

新潟県大会
作文集



人権イメージキャラクター
「人KENあゆみちゃん」
「人KENまわる君」

～人権啓発キャッチコピー～

「誰か」のこと じゃない。



令和6年度 全国中学生人権作文コンテスト新潟県大会表彰式（新潟市民プラザ 12/7）



「新潟地方事務局長賞」を受賞した関川村立関川中学校3年 佐藤萌加さん による朗読

は し が き

新潟地方事務局と新潟県人権擁護委員連合会は、次代を担う多くの中学生に、人権に関する作文を書くことによって、全ての人がお互いの人権を尊重し合うことの大切さを伝えるための人権啓発活動の一環として、昭和四十七年度から中学生人権作文コンテストを実施しています。

本年度の新潟県大会には、県内百八十四の中学校から、八千五百十五編の作品が寄せられました。いずれの作品も、次代を担う中学生の皆さんが、人権に関する問題に感じたことやどう向き合っていくべきなのかを一生懸命に考えた作品ばかりでした。

この作文集には、数次にわたる審査を経た優秀作品十編を収録しました。より多くの方々にお読みいただいて、地域社会に人権尊重の輪が一層広まり、人権問題を「誰か」のことでなく、自分のこととして捉え、配慮し合うことのできる、やさしく思いやりのある社会が築かれるための一助となることを願ってやみません。

終わりに、本コンテストの実施に当たり、熱意を持って応募された中学生の皆さんを始め、多大な御支授と御協力をいただきました新潟県教育庁、新潟日報社、NHK新潟放送

局、株式会社アルビレックス新潟の皆様、また、多大な御尽力をいただいた中学校教育関係者及び関係各方面の方々に対しまして、心から感謝を申し上げます。

令和七年二月

新潟 地 方 法 務 局 長 横 井 秀 行

新潟県人権擁護委員連合会会長 山 崎 光 子

令和六年度

全国中学生人権作文コンテスト

新潟県大会作文集

目次

審査講評

人権が「ある」ことと

「守る」こと ……

審査員代表

前田有樹 …… 1

新潟地方務局長賞

「共に生きる」 ……

関川村立関川中学校 三年 佐藤 萌加 …… 3

新潟県人権擁護委員連合会会長賞

言葉の力 ……

新潟県立佐渡中等教育学校 三年 中村 虹湖 …… 6

新潟県教育委員会教育長賞

障がいは十人十色 ……………

三条市立第三中学校 二年 清水 あすか …………… 9

新潟日報社賞

「楽しい」は平等である ……………

新潟市立東新潟中学校 三年 志賀 杏樹 …………… 12

NHK新潟放送局長賞

誰もが自分らしく ……………

新潟市立亀田西中学校 一年 中林 祐希 …………… 15

アルビレックス新潟賞

平等は心の優しさ ……………

加茂市立葵中学校 二年 朝日 誠大 …………… 18

優
秀
賞

差別への意識	………	新潟市立葛塚中学校	三年	猪爪 柚希	………	21
望みを叶えるために	………	新潟市立大形中学校	二年	長谷川 煌樹	………	24
本当のバリアフリー	………	長岡市立堤岡中学校	三年	田中 力斗	………	27
誰を優先すべきなのか	………	上越市立柿崎中学校	三年	小林 未波	………	29
令和六年度全国中学生人権作文コンテスト新潟県大会入賞作品	………				………	32
令和六年度全国中学生人権作文コンテスト新潟県大会応募作品内容別内訳調べ	………				………	34

人権が「ある」「と」と「守る」「と」と

審査員代表 新潟日報社編集局報道部第二部長 前田 有樹

障害のある人は自分と違う、かわいそうな人だと思ひ込む。軽い気持ちで友達をからかうような言葉で口にする。バスの優先席で寝たふりをして、お年寄りに席を譲らない。

そんな経験をしたり、見たりしたことがあるという人が結構いるのではないだろうか。一見、身の回りでよくありそうなことが、実は差別につながったり、人を傷つけたりします。今回の受賞作品が、私たちにあらためて気付かせてくれたことです。

世界では今この瞬間も、深刻な差別、人権侵害が行われています。アメリカでは、人種差別を背景にした暴力が後を絶ちません。ウクライナやパレスチナで起きている戦争では、多くの一般市民の命が奪われ続けています。これらの大きなニュースになっている問題も、本をただせば、一人一人の心に潜む、人権を軽視するような意識から始まっていると思えてなりません。

受賞作品は、そうした私たちの意識のあり方について問いかけるものばかりでした。

新潟地方事務局長賞に選ばれた関川村立関川中学校三年、佐藤萌加さんの作品「共に生きる」は、障害者がかわいそうという思い込みが無意識の差別を生むと指摘しました。差別をなくすには、人を性別や年齢、障害のあるなしといった枠にはめず、「一人の『人間』として、その人に向き合う必要がある」と訴えました。

新潟県人権擁護委員連合会会長賞に選ばれた新潟県立佐渡中等教育学校三年、中村虹湖さんの作品「言葉の力」は、友人の心ない言葉に傷つけられ、寄り添ってくれた言葉で救われた経験から考えを巡らします。そして、相手を気遣う想像力と共感力が「よりよい社会を築くための鍵になる」とつづり、その実践を誓いました。

この二作品だけでなく、入賞したどの作品も、何が問題かだけでなく、それを自分ごととして、どう解決につなげるかが示されていました。

人権について考えるとき、高校の教科書で読んだ『である』ことと『する』こと」という評論を思い出します。戦後の日本を代表する政治学者、丸山真男さんが六十年以上も前に書いた文章で、今でも高校の国語の教科書で教材として使われています。

丸山さんはこの評論で、今の私たちにとって当たり前になっている「自由」について、「置き物のようになそこにあるのではなく、現実の行使によってだけ守られる。日々自由になろうとすることによって、はじめて自由でありうる」と指摘しています。自由で「ある」ということに安住し、「守る」ことを怠ると、いつのまにか自由が奪われかねないという警告でもあると思います。

この考え方を人権問題に当てはめるとどうでしょう。日本では、基本的人権が憲法で保障され、当たり前にあるもののようにも見えます。しかし実は、私たちがそれを守ろうと日々努力しなければ、どこかで侵されてしまうのではないのでしょうか。現実には既に、さまざまな形で侵されてもいるのです。

受賞作品の多くには、人権を守るために自分は何をするのが書かれています。同じような気持ちを持つ人々がたくさんいて、実際に行動すれば、社会がよりよい方向に進むだろうと思わせてくれました。

この作文集を手にとった方々にはぜひ、掲載された作品をじっくり読み、自分は何をしようかと考えていただきたい。そうするだけで、人権が尊重される社会へと一歩近づくはずですよ。

「共に生きる」

関川村立関川中学校

三年 佐藤 萌加

「アンコンシヤス・バイアス」、この言葉の意味についてどれだけの人が知っているのだろうか。この言葉の意味は「無意識の偏ったものの見方」「無意識の思い込み」「無意識の偏見」などと表現される。私は差別がなくならない理由は、この「無意識の思い込み」に原因があると考えている。

「アンコンシヤス・バイアス」には、様々な例がある。例えば、性別、年齢、学歴などから発生する思い込みが挙げられる。その中

でも、私が生活していて特に気になったものは、「障害者はかわいそう」という思い込みだ。障害者の人達は、確かに周りの人の補助が必要かもしれない。だが、私達も一人で生きることができない。常に誰かの支えが必要なのだ。そう考えると、障害がある人も、そうでない人も変わらない。人間は、全員が不完全なのだ。だから目をそらしたり、否定したりすると、傷つけ合うことになる。そうならないためには、相手のことをよく知ろうとする気持ちが必要だ。人にはそれぞれが抱える悩みや、生きづらさがあり、日々あがいて前に進むとうとしている。他の人に共感できても、その人に成り代わることはできない。相手を百パーセント理解することは、不可能だ。だから、お互いに傷つけないようお互いのことを知り、ちょうどいい距離感を見つけて。そして、お互いが困ったときに手を差し伸べ合う。これが、差別を無くすためにでき

ることだと私は思う。

しかし、そう今は考えられるようになったが、以前は自分も「障害者はかわいそう」と思い込んでいた。私には、双子の姉がいる。姉には発達障害がある。自分と血を分けた姉が、障害者であることに、私は負い目を感じていた。「なぜ、姉だけが不自由な思いをしなければならぬのだろう」と、考えると苦しくなった。きつと、家族もそう感じていたのだろう。私は家族から、「あの子は、かわいそうな子なんだよ。だから、あなたはあの子の分まで頑張りなさい。」と、口癖のように言われてきた。私も、その通りだと思っていた。だから「自分に、姉の分の思いを勝手に乗せるな！ 重荷だ！」と思いつつも、勉強も、習い事の習字も、良い結果を出そうと努力した。自分には障害がないことの償いをするように。それこそが、「勝手な思い込み」だった。そんな私の思い込みが、間違っ

ていると気づかせてくれた人がいた。金澤翔子さんだ。彼女はダウン症という障害がありながら、書道家として活躍をしている人だ。

インターネットで書道の作品を調べているときに、金澤翔子さんの作品を見つけた。

「共に生きる」その五文字は、始筆から終筆、かすれている線や飛び散った墨まですべてが美しく生命力に溢れていた。金澤さんの書を見ていると涙が溢れてきた。「かわいそう」という自分の思い込みが、間違った考えだと気づかされたからだ。障害がある人のことを、「かわいそう」という目で見ている、それが差別なのだ。同じ人間なのに平等に接することなく、無意識に自分より下の存在として見ているからだ。人は、みんな不完全なのに。

金澤さんの書を見て感動したのは「自分の差別心」に気づいたからではない。金澤さんの素敵な生き方そのものに、触れたからだ

思う。健常者にはない感性や素晴らしい能力があり、書を通じて「障害があるとかないとか関係ない」と自分の生き方を発信している。そして、金澤さんの家族もすごいと思う。障害があるわが子の才能を見出し、一緒に生きていく道を見つけたからだ。そんな金澤さんの生き方に触れ、誰にでも「生きる道」があり、それを見つける権利があることを学ぶことができた。

「無意識な差別」を無くすために私達ができること。それは、勝手な思い込みから発する「アンコンシャス・バイアス」があることを知ることだ。そして性別や年齢といった、枠に当てはめず、一人の「人間」として、その人に向き合う必要がある。もちろん、百パーセント相手のことを理解することはできない。だからこそ、お互いをよく知り、ちょうどいい距離感を見つめる。そして、お互いが困ったときに手を差し伸べ合

う。これが差別をなくすためにできることだと私は思う。

私の姉には、発達障害がある。だが姉は、少しずつ前に進んでいる。着替えができるようになったり、食事を自分で食べたり、最近では家族の食器洗いを手伝ってくれた。できないと決めつけ、手助けをするのではなく、相手のペースに合わせる。それが、「共に生きる」ということではないだろうか。姉には姉の、私には私の思っている道がある。姉のために生きるのではなく、「共に生きる」。そのことを忘れずに、これから「私の道」を力強く歩きたい。差別のない未来へ向かって。



言葉の力

新潟県立佐渡中等教育学校

三年 中^{なか}村^{むら}虹^こ湖^こ

「ここちゃんてさ、あざといよね。」

その言葉が聞こえた瞬間、私の心に、何かがぐさっと刺さったのを感じた。

それは、中学生になって間もない頃。ある日、少し仲良くなった子たちと一緒に帰っているときだった。突然そのようなことを言われ、私は思わず、(えっ)と聞き返した。すると、他の子も

「わかるわかる!」「私も思ってた!」

と次々と口に出した。周りには皆、笑ってい

た。どうやら、話についていけないのは、私だけのようだ。(嫌だなあ。でも、本当のことを言って、自分から関係を壊すのは、もっと嫌だなあ) そう思った私は、

「そうかなあ」と必死に笑ってごまかした。

家に着くと、理由も分からない涙が出てきた。そして、そのとき初めて、心が傷ついているのだと気がついた。

誰にも言えないまま、時間が過ぎていった。そんなある日、友達から

「何かあったら、誰かを頼っていいんだよ。」と言われた。その瞬間、私の中で、ずっともやもやしていたものが、一気に晴れた気がした。そして私は、その友達に、すべてを話した。

彼女は、私が話し終わるまで、何も言わず真剣に聞いてくれた。私自身も、話していくうちに、張りつめていた心が緩んでいくような感じがした。

これまで私は、人を頼ることは、弱い自分を見せるようで、恥ずかしいと思っていた。しかし、相談してみても、その考えが百八十度変わった。

この経験から学んだことがある。「言葉こそが、人を傷つける最大の凶器である」ということだ。人は、言葉を使って、自分の気持ちを表現することができる。その一方で、誤解を招いたり、誰かを傷つけることもある。どんなに親しい関係であっても、相手の本音は分からない。だからこそ、「親しき仲にも礼儀あり」ということわざを、忘れてはならないのだと思う。

また、言葉は誰かを守る力にもなる。私はその力によって救われたうちの一人だ。彼女のような強くて優しい言葉をかけてあげられるような人になりたいと心から思った。

小学一年生のときの道徳の時間に、「ふわふわことばとちくちくことば」の学習をした

のを、今でも覚えている。相手をうれしくする言葉と、相手を傷つける言葉をふせんに書き分け、みんなで話し合った。

「ふわふわ言葉でいっぱいクラスになるといいね。」

と話していたあの頃から、八年がたつ。今、私のクラスは、あちらこちらから

「バカ!」「黙れ!」「死ね!」

という言葉が、次々と聞こえてくる。理由を聞いてみると、

「だって皆言っているし、別によくね?」

と返ってきた。そんな暴力的な言葉を簡単に使ってよいはずがない。それに気づいてほしくて、私は、この作文を書くことにした。

今の時代、スマートフォンやSNSが普及し、言葉によるトラブルや、誹謗中傷の被害が後を絶たない。たった一人の一言から、多くの人が加わって、やがて大きな凶器となる。考えただけでも恐ろしい。

今後、私たちに必要となってくるのは、相手を気遣う想像力と共感力だ。皆が相手の気持ちを想像し、理解し合うことが、よりよい社会を築くための鍵になると思う。

そのために、まずは自分のクラスを、ふわふわ言葉であふれるクラスにしていきたい。

初めは挨拶からだ。挨拶は、人と人との心をつなぐものであり、心の絆を深める第一歩ではないかと思う。さらに、相手を気遣うために、その人のことをよく「知る」ということも大切だ。色々な方向から光を当てて、相手への理解を深めていく。私にもできることから、実践していきたいと思う。

私たちは皆、かけがえない存在だ。全ての人に意志や個性があり、幸せを求める権利を持っている。ひとりひとり、自分の色や形が違うから、おもしろい。だからこそ、私たちは、苦手なことをお互いに補い合いながら、生きているのだと思う。

よりよい社会を築いていくため、自分にできることを見つけ、一つずつ行動に移していきたい。一人一人の小さな力が、いつか明るい未来を切り開く、大きな力になると、私は祈っている。



障がいは十人十色

三条市立第三中学校

二年 清^{しみず}水^{みづ} あすか

最近、「障がい」の「がい」がひらがな表記されているのを見かけるようになったと感じています。それは、「障害」を「障がい」や「しょうがい」と表記することによって、否定的なマイナスイメージを和らげようとする動きが行政を中心に広がっているからだと思います。

なぜ私がこの言葉が目につくかというところには障がいをもつ兄がいるからです。私の兄は、生まれる時に脳出血を起こし、

その後の後遺症で左片麻痺と右耳難聴があります。この後遺症は治るものではなく、麻痺については今もリハビリに通っています。

私は、小さい頃から兄の療育園に付いて行き、様々な障がいをもつ人を見てきました。見ただけでどこに障がいを抱えているのか分かる人もいれば、ちょっと見ただけではどこが障がいなのか分かりにくい人もいます。

私の兄の場合は後者です。兄は早い頃から左足に短下肢装具といって膝下の装具をつけて歩いていました。夏の半ズボンの季節になれば、足に障がいがある人と認識されますが、長ズボンをはいていると一見どこが悪いのか分かりません。歩き姿を見れば、足が不自由そうだと分かりますが、ただ立っている姿はどこか悪そうには見えません。

その分かりにくさが、社会で生活しているなかでメリットになったり、かえってデメリットにもなることを私は家族の一人として

感じています。

兄は話が上手で、人とコミュニケーションをとるのが得意です。周りの人達も見た目の先入観を持たず兄に話しかけてくれることも少なからずあると思います。人は、第一印象を視覚に頼るところがあるので、見た目での分かりにくさに助けられている部分もあると感じています。

逆に、分かりにくさゆえに周りの人達から理解してもらえない、周りの人達には理解しづらいところがあります。しかも、兄は中学生の時に、何度か手術をして、脚の長さをそろえ、尖足も調整したので、装具を卒業しました。半ズボン姿で見る角度によっては、大きな手術痕が見えますが、普通に立っている分には、どこも不自由そうには見えません。

だから、兄は「そんなこともできないの？」と同級生から言われたり、多目的トイレを使おうとして入る時に、ジロジロ見ら

れたりしたことがあります。家族で買い物に行った時、おもいやりスペースに駐車して車を降りた時に、介護タクシートの運転手さんに、にらまれたこともあります。もしかしたら、車についていた身体障害者のマークが見えなかったのかもしれないし、介護タクシーには兄よりも重い障がいの方が乗っていたのかもしれないのですが。

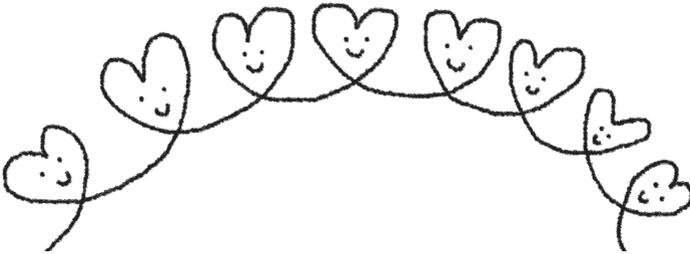
私は時々、理解してもらえない場面に出くわすと家族の一員として悲しい気持ちになります。兄はそんなことはあまり気にせず、自分の体のことをオープンに周りに伝え、理解してもらおうと努力をしています。自分の体を受け入れ、前向きな兄を私は尊敬しています。

ただ、兄のように自分の言葉で伝えることが上手な人もいれば、苦手な人もいます。始めにも少し触れましたが、障がいは種類も程度も人それぞれであり、その人の思

いや自身の受け入れもまた様々であると思います。

健常者と障がい者という区別や差別をすることなく、一人一人がその人らしく、社会で生活していけるように、今の私に何ができるのか、はっきりしたものはなかなか思いつきません。けれども、私には身近に兄という存在がいて、また小さい頃から、様々な障がいを持ちながらリハビリに通っている人を見てきた経験があります。障がいのあるなしに関わらず、偏見を持たずに人と関わり、もし何か不自由さを感じている人がいたら声をかけ、自分のできる範囲で手をさしのべられるようにまずはなりたいです。

そして、障がいを持つ人達が周りから理解され、健常者と共存することで、不自由さがあっても、不幸であるとは思わずに生活できるようにになったらいいなと思います。



「楽しい」は平等である

新潟市立東新潟中学校

三年 志賀杏樹

世の中には、様々な障がいを持つ人たちがたくさんいます。視覚障がい、聴覚障がい、精神障がい……。ニュースや新聞などで、障がい者差別の話を聞くと、とても心が痛くなります。その度、自分は絶対にそのような差別はしたくない、そして、自分はきっと普通に接することができるはずだと思っています。しかし、中学二年生の夏、私はそれが間違っていたと痛感しました。

私の学校では、二年生の夏休み前に職場体

験がおこなわれます。私が大きな期待を持って臨んだ職場体験の場所は、小さな映画館で、アットホームな雰囲気、常連さんにも新規さんにもフレンドリーに接する素敵なお店でした。全員とても温かい人たちで、最初はグループリーダーということで不安だった私も、徐々に緊張がほぐれていきました。

「ここが、映画館であっていますか？」私が店頭でお客様の誘導係をしていた時、そのような声が聞こえました。見ると、目を閉じ、白杖をついたおばあさんがこちらに歩いてきていました。私は戸惑い、「本当にこの人が映画館に来たの……？」と、その時、思っていました。「手を引いてやって」とスタッフさんに言われましたが、私は勝手が分からず、何もできずにただ視線をうろろとさせるだけでした。そんな私に代わって、中から出てきたスタッフさんが誘導をしました。私はその間、呆然と立っ

した。短い時間でしたが、私はその時確かに「盲目の人が映画を観ること」をおかしいと思ってしまったのです。それに気付いた時、私は私が情けなくて仕方ありませんでした。無意識にそれをおかしいと思っていた自分が恥ずかしくてたまりませんでした。

映画館の人は、「長年やっていて、このよ
うな人が来たのは初めて」とおっしゃって
いました。ですが、彼らはあくまでいつも通
りにフレンドリーに接し、穏やかに話しながら
劇場まで手を引いて行っていました。私には
それができなかった。私は本来そうするべき
だったのに、それができませんでした。数時
間後、おばあさんは「楽しかったです」と
言って、映画館を出ていきました。その時私
はやっと、誰でも映画を楽しむ権利があるの
だと気付きました。この体験の後、私は少し
ずつ、まずは障がい者の人たちの娯楽につ
いて知りたいと考えるようになりました。

日本人の七%余り、約十三人に一人は、何
かしらの障がいを持っていると言われていま
す。調べてみて、世の中には様々なバリアフ
リー施設があることを知りました。その中で
も、「ユニバーサルシアター」という、障が
い者も健常者も、一緒に映画を楽しめる劇場
があること、音声ガイドを聞くことで映画の
登場人物や今の状況など多くのことを理解で
きること、「耳で聞かない音楽会」という、
聴覚障がいを持っている人でも音楽を楽しめ
るよう企画されたものがあることなど、誰で
も文化を楽しめるんだと気付かせてくれる活
動に、とても興味を持つことができました。
そして、障がいについてもっと知り、理解
し、今よりもっと全員が全てのものを自由に
楽しめる世の中を作っていきたいと思うよう
になりました。

私の将来の夢は、本に関わる仕事をするこ
とです。夢と希望の宝箱であり、私にとって

とても大切なものである本は、今まで何度も私を救ってくれました。だから私も、その本という存在を通して、未来の子どもたちに夢と希望を届けたいのです。そして、それと同時に視覚障がいの方でも楽しめる本も、作っていきたいと思っています。

視覚障がいの方のサポート道具といえば、やはり点字や録音図書が有名だと思います。しかし、それらを用いた本はまだ少ししかなく、それゆえに内容は名作やベストセラーに偏っています。なので私は、色々な人が自由に文化を楽しめる世界を作るために、いつかは子供たちの読む児童文庫や現代小説など、様々な種類の点字の本を製作し、世界中の人に届けたいと考えています。

このような自分の夢を持つにあたって、私はまだまだ障がいについて知らないことがたくさんあると学びました。私たちが普段友人と話すように、誰が、誰とでも「楽しい」と

いう感情を共有できるようなツールを世界に届けたい。その想いを胸に、私は前に進んでいきます。夢はでっかく、理想の未来を実現させるために、まずは一步一步地道に学び努力していきたいと思います！



誰もが自分らしく

新潟市立亀田西中学校

一年 なか 中 ばやし 林 ゆう 祐 き 希

みなさんは「障害」を知っていますか。障害は「身体障害」、「知的障害」、「精神障害」の大きく三つに分けられます。日本では約三人に一人が何らかの障害を持っていると言われています。

私も「自閉症スペクトラム（ASD）」という障害があり、中学校の特別支援学級に通っています。五才の時にASDと診断されました。ASDの特徴として言葉を文字通りの情報として受け取る、自分の意見を相手に

伝えるのが苦手、こだわりが強い、良いか悪いかで考える白黒思考、失敗した事をずっと考えてしまう反芻思考、光、音に神経質になる感覚過敏、相手の気持ちを考える事が苦手などがあり、対人関係を築くことが苦手な人が多いです。

日本ではいまだに障害のあることを理由とした「障害者差別」が残っています。誰もが人権の侵害、差別、いじめを良くないこと、絶対にしてはいけないことだと思っているはずです。しかし、悪口やインターネット上の誹謗中傷がなくなっていないのが現状です。私も障害があるということを理由にいじめを受けたことがあります。小学六年生の時のことです。体育の授業で「ティーボール」の単元でした。その日の授業は隣の人とペアになり、キャッチボールとバッティングの練習をするというものでした。ですが、ペアのAさんは「あいつ、全然喋らないから嫌だ。」と

言い、その人は別の人と勝手にペアになり、キャッチボールを始めてしまいました。別の日には「思考停止」、「ずっと一人でいるしさ、何なの。」と言われました。Bさんから「どうして、交流学級では勉強できない。病気なの。」と言われた事もあります。私はそのような言葉を聞いて、とても胸が痛くなりました。それと同時に、まだ、障害のある人を差別する人がいるのかと、とても残念な気持ちになりました。「自分は何をやってもダメなんだ」、「どうして生まれてきたんだろう。」と考えるようになった時期もありました。今は嫌なことを言われる事はなくなりましたが、私の心にはその時の傷が深く残っています。

前述でも紹介した通り、私も障害があることを理由にいじめを受けたことがあります。母も障害があり、大学生の時に嫌なことを言われたことがあります。障害者差別は今も

残ってしまっています。では、どうすれば障害者への差別をなくすることができるのでしょうか。私は差別のない社会をつくるために大切なことは何か考えてみました。

まず、大切なのは、「自分がされて嫌なことは人にしない」ことです。常に相手の気持ちを考えて行動することで差別を減らすことができるのではないのでしょうか。嫌なことを言ってしまったAさんとBさんも相手の気持ちを考えずに行動してしまったのだと思います。あなたはいじめ、差別をされて嬉しいですか。いじめを受けて、差別されて嬉しいと思う人は誰もいません。もし、自分がその立場になったらどういう気持ちになるか考えて行動すれば、いじめ、差別は間違いなく減るはずで。

「違いを認め合う心をもつ」ことも、差別をなくす上でとても大事なことです。一人一人、意見や考えも違います。得意なこと、苦

手なこととも違います。だからこそ、お互いを認め合い、尊重することです。

「障害がある人への理解や知識」をもつこととです。障害がある人は誰しも望んでそうになった訳ではありません。生まれつき病気でそうなってしまった人や事故で障害になってしまった人もいます。障害のある人、一人一人の特徴、個性に対する理解を深めることが障害者差別をなくす第一歩になります。また、障害のある人は何もできない訳ではありません。人間は神様ではありません。誰も、得意なこと、苦手なことがあります。障害がある人も同じです。例えば、こだわりが強い、でも、集中力がある、集中することが苦手だけど、行動力があるなど得意、苦手があります。その人の個性について理解することが重要です。

私は障害があることを理由にいじめを受けてきました。今でも障害者差別が根強く残っ

ていることが残念でなりません。差別をなくすためには一人一人が理解を深め、相手の気持ちを考えて行動することが大切です。

最後に、私はこの文を書くにあたって、母に止められました。私がまた傷つくのではない心配だったそうです。私は文を書くことを決断しました。声を上げなければ差別は無くならないからです。人々の意識を変えなければ差別は繰り返されてしまいます。人の考えの違いによって生まれてしまったのが差別です。誰もが自分らしく生きられる社会をつくるために差別のことを考えてみませんか。



平等は心の優しさ

加茂市立葵中学校

二年 朝あさ日ひ誠まこと大ひろ

差別は絶対にやってはいけない。誰もが当たり前だと思っっている常識だが、その当たり前が、できていない人が多いように私は感じている。全員が差別について知っているはずなのに、今も差別がなくならないのはなぜだろう。これは、差別を理解していても、相手の気持ちを考えずに行動し、無意識に人を傷付けてしまっている人が多いからだと思う。

私は、小学六年生の時に、こんな体験をした。四月に一年生が入学してきて、私達六年

生がお世話をするようになった。清掃の時間に一年生が重そうな机を運んでいたの、私は思わず、「大丈夫？運んであげるよ。」と声をかけた。しかし、その子は、「自分でできるから大丈夫。」と少し悲しそうに言った。私は、自分が良かれと思ってかけた言葉が、相手を不快にしまったことに驚いた。それと同時に、その子を自分より下の「弱者」と見ていたことに気付き、ショックを受けた。相手が本当に必要としている手助けかを考えずに、間違った思いやりをしていた自分に腹が立った。そして、私達は、知らず知らずの間に、様々な人達のことを「弱者」と見て生活してしまっているのではないかと思った。

皆さんは、「障害者」という言葉を聞いてどのようなイメージを持つだろう。障害や病気を持つ人達のことを、「かわいそうな人」や「変わった人」などと無意識に軽蔑してい

ないだろうか。このように、障害や病気を持つ人達のことを、冷やかかな目で「弱者」と見ているようでは、差別やいじめは絶対に無くならない。反対に、お互いの個性を認め、尊重し合える環境を整備すれば、私達の意識が変わり、障害による差別やいじめが減ると思う。私達と障害を持つ人達の間にある見えない「壁」を取り除くことが、問題解決に向けての鍵になると考えた。

その一つが、「バリアフリー」だ。この言葉は直訳すると、「障壁の除去」という意味だ。その名の通り、障害を持つ人や高齢者の人達のために、生活する上での不便や、妨げ（バリア）を取り除く取り組みだ。私は、バリアフリーに注目して生活してみると、身の回りに多くのバリアフリーがあることに気付いた。例えば、車いす専用の駐車場や、階段と一緒に取り付けてあるスロープなどだ。私は足を捻挫した時に、階段に手すりがある

だけで、とても歩きやすかったことを覚えている。バリアフリーが、障害を持つ人や高齢者の人達の暮らしを支えていることが分かった。

基本的人権の一つに、「平等権」という権利がある。平等権とは、性別や年齢、職業などによって差別されること無く、全ての人々が等しい扱いを受ける権利のことだ。私はバリアフリーも、この平等権を尊重している取り組みだと思う。障害を持っているだけで、「かわいそう」といったマイナスイメージを払拭すれば、障害を持つ人達が、障害の無い人達と同じような生活を送り、幸せに生きていくことができると思う。

しかし、これでは正直、障害を持つ人達だけを対象とした特別扱いで、平等権に矛盾しているように私は感じた。何か良い解決策は無いかと調べてみると、「ユニバーサルデザイン」という考え方を知った。ユニバーサル

デザインは、障害者であるアメリカのロナルド・メイスさんが広めた考え方だ。これは、最初から誰でも使いやすいデザインで、障害の有無に関わらず、誰でも公平に利用できるということを大切にしている。例えば、自動ドアは、車いすを使用している人だけではなく、荷物を持って人々や赤ちゃんを抱えている人など、全員にとって便利なものだ。バリアフリーよりも、より身近に多くあり、私達の暮らしに必要な存在だと思った。

ここまで、バリアフリーとユニバーサルデザインについて考えてきたが、私は、どちらにも共通している大事な部分に気付いた。それは、どちらも一人ひとりが、快適に暮らせる社会を目指しているということだ。対象者に違いはあるが、お互いを尊重し、誰もが人間らしく共に生きていこうという開発者の心の優しさは、共通していると思う。

そして、差別の無い平等な社会にするため

には、私達の行動が最重要だ。道具や施設などの環境が整備されても、やはり、それぞれが個々を認め、助け合っていかなければ、差別という人権問題は無くならないだろう。そこで私は、バリアフリーとユニバーサルデザインが教えてくれた、優しい心を持って生活していきたい。障害を持つ人がいたら、自分にできることを探し、時には声をかけてみる。そんな些細な心の優しさの積み重ねが、人と人との間にあるバリアを取り除くきっかけになると思う。そして、誰のことも対等な人間として見る。そうすれば、人それぞれの個性やその人らしさを発揮できて、生きやすく、明るい社会になっていくと心から信じている。



優秀賞

差別への意識

新潟市立葛塚中学校

三年 猪いの 爪つめ 柚ゆず 希き

「バレエを習っているんだから、肌を焼かないようにしなさい。」

バレエを習っている私は、幼い頃からよくこう言われてきた。バレエをしている人は当然のことだと思う人が多いと思う。そういう私も小さい頃はなんの疑問も持たずに聞き入れ、肌が黒くならないように気をつけてきた。けれど、バレエは肌が白い事が「美しい」「綺麗」となるのか。これは、肌の色による人種差別と捉えられるのではないかと疑

問を持つようになった。

そこで、バレエでの人種差別に関する事について調べてみた。そうしたら、黒人ダンサーが白粉を強制的に塗らされたり、嫌がらせをされるなど差別があったと分かった。他の白人と見た目を揃えて「綺麗」に見せるためだとしても、本人が拒否していることを強制させるのは違うし、その人を否定するようなことだと思った。だが、真っ黒い肌のダンサーが白鳥の湖などで、真っ白い衣装を着て薄暗い中弱々しく踊っている様子を想像すると「正直、白人ダンサーだったらもっとよかったな」と思える自分がいた。差別はいけないことだと思い、自分は差別をしないと思っていたが、人種差別になることを思っていた自分や、疑問に思ったバレエは肌が白い方が「美しい」「綺麗」だということが当然のことになっていて自分に気づき、驚いた。

黒人だけでなく、私たちのような有色人種

に対しても、人種差別がおきていることが分かった。アメリカの各バレエ団が公表している資料を見ると、ダンサーの中でアジア系ダンサーの割合が10%にも満たないバレエ団が半分近かった。実力がないと活躍することができないバレエの世界で、このようなことがおこっていることを知り、私は悲しくなりました。このことが、人種差別によるものだけではないかもしれない。けれど、有色人種のバレエダンサーが少ないのは事実である。だからといって、差別をなくすために無理に有色人種を雇うことは違うと考える。この問題を誰もが納得できるように解決されてほしい。

このような人種差別から、優れたダンサーが活躍の場を失い、ダンサーをやめてしまったりすることがある。私は何よりも、優れたダンサーが活躍できず様々な踊りを見られなくなるのが悲しい。人種に関係なく、実力のある優れたバレエダンサーにたくさんの賞

賛がおくられる日が来ることを願っている。

もっとよく調べていくと、バレエで多様性が意識されてきていると分かった。その一つとして、黒人ダンサー用のトゥシューズである。そのようなトゥシューズのなかった昔、黒人ダンサーはピンクのトゥシューズをファンデーションなどで何時間もかけて茶色にしていた。だが多様性が意識され始めたバレエの世界で黒人のためのトゥシューズが作られたのだ。そのほかにも、海外の有名なバレエコンクールなどで白人以外の有色人種の入賞者が増えてきている。差別を受けてバレエ団に立ち向かっている人もいる。そのことを知り、私は嬉しくなった。だが、それと同時にそれだけかという思いもあがってきた。差別をなくそうと動いている人がごく少ないからだ。だが、少なくとも活動を続けていくことで、少しずつだが問題を解決しようとする人がバレエ団を運営している人の中など、

様々なところで増えていくと思う。

今まで私はバレエは人権差別などの問題と関係がなく、美しいものだと思いついてきた。だが、調べていくにあたってそうではないことが分かった。自分が差別的なことを思っていたことも分かった。ダンサーへの人種差別以外にも、差別的要素からバレエの演目が中止されたことや、バレエは女の子がやるものだという固定観念からバレエをしている男の子がからかわれたりいじめられて、やめてしまうなどの差別もうまれている。

差別について調べていく中で私は、差別の問題が解決に向かうためには、差別について理解し、差別への意見を高めていくことが重要だと考えるようになった。また、バレエでの差別で考えると、バレエは揃っているから「美しい」「綺麗」だということから人の考えや、バレエはつみ上げられてきた伝統の物語や踊りだということなど差別の解決が難

しくなる、様々な問題がある。これは、バレエだけでの問題ではないと思う。どんな差別にも解決を妨げる問題がついてくるだろう。けれど、そんな問題にも、差別の問題を意識することがまずは大切になると思う。そして差別の問題への意識を続けていき、人種や性別など関係なく、自分が好きなことを続けられるような世界になってほしい。そんな世界になれるように、まずは差別への意識をして、そのほかにも自分にできることを探し、活動していきたいと思う。



優秀賞

望みを叶えるために

新潟市立大形中学校

二年 長谷川 煌樹

母に薦められて一本の映画を観た。終戦間際の日本と特攻隊員たちの日々を描いた作品で、当時と今との社会環境や価値観の違いにとても驚かされた。勝つことのみを考え、人権などお構いなしに命を犠牲にしていた時代。個人の意思は無視され、命令に従わないと危害を加えられたり、「生き恥」だと罵られたりすることもあった。家族を救うために戦い、大切な未来を奪われた特攻隊員たちの心情を想うと、可哀そうで仕方なく、自然と

怒りが込み上げてきた。戦争の恐ろしさ、逆らうことが許されなかった時代の理不尽さを感じ、悔しくて悲しくて涙が止まらなかった。

何十年も戦争から遠ざかっている日本にいと、安全で平和な日常がいつまでも続くと思いがちになる。戦争のニュースを見ても、どこか他人事のように感じている自分にハッとするとときもある。それを「平和ボケ」と表現する人もいるけれど、僕が今、平穏で自由のない生活を送れていること自体、すごく幸せなことなのかもしれないと気づいた。

人権は、僕たちの身の回りにあふれていて、空気のようにあって当たり前なものであり、守られるのが当然だと思っている。でもそれは、日本に住み、基本的な人権が憲法で保障されている日本国民だからであって、国外に一步出れば、不当な扱いや差別を受けることも少なくない。世界中には、人権が認めら

れずに、様々な困難や苦しみと戦っている人たちが大勢いる。今、世界のあちこちで争いが絶えず起こっていることを考えると、いつ大規模戦争が始まってもおかしくないし、常に危機感をもって過ごす必要があると思う。国どうしの争いや不安定な情勢によって、人権が脅かされ、命の危険を感じながら生活している人たちがいることを忘れてはいけない。生まれる国が選べないからこそ、人権は保障されるべきだと強く感じている。

なぜ争いは起きるのだろうか。差別、偏見、いじめ、暴力など、そのすべての原因は、人権を無視した行動から生まれるものだと思う。身近で生活に直結することだからこそ、憎しみや不満が増大しやすく、いつのまにか大きな争いごとへと変わっていく。戦争は、個人の尊厳を無視した行為だ。地球に生きるすべての人たちの人権を守ることが、争いを食い止める唯一の手段なのかもしれない。そ

して、持続可能な未来をめざすためには、立場の弱い子どもたちを、困難や苦しみから救っていくことがさらに重要だと思っている。

子どもの人権について考えたとき、まず、頭に浮かんだのは、子どもの貧困だ。日本の子どもの七人に一人が、相対的な貧困の状態にあり、ひとり親家庭の貧困率は、先進国の中でも最悪な水準だといわれている。僕は、母子家庭で育った母に、子どもの頃の暮らしぶりについて聞いてみた。祖母は、仕事を掛け持ちしながら長時間働き、体力的にも経済的にも厳しい中で、母と伯母を育ててくれたそう。母は、祖母の代わりに家事をし、勉強や部活動にも積極的に取り組んだ。そのおかげで、高校から短大までの五年間、JASSOから奨学金の貸与を受けられることになり、希望していた進路へ無事に進学、卒業することができた。資金不足を補うため、高校

入学当初からアルバイトを始め、学業との両立を図っていたが、周りとの経済的な格差を感じてつらくなることもあったという。就職してからも、奨学金を完済するまでの十数年は、金銭面での不安や精神的な負担を感じる部分が多かったとも話していた。

低収入の家庭では、子どもが十分な教育を受けられないことで、進学や就職の機会が狭まり、大人になっても貧困になってしまったといった「貧困の連鎖」を生みやすくなると聞いたことがある。生まれ育った環境で、夢や将来を諦めてしまうことがないように、社会全体で支え合うことが大切だと分かった。

母は、心配や迷惑をかけたくないという思いが強くて、ずっと甘えられずにいたと語っていた。僕は、誰もが、どんなときでも、躊躇なく頼れる社会であってほしいと思う。日本には支援制度がたくさんあるけれど、利用する人がいなければ意味がない。見えないS

OSに気づき、その思いをくみ取る努力をしていくことが重要だし、必要な情報を伝え、手段を提示し、将来への道筋をサポートしていくことが人権を守ることに繋がると感じた。

この春、僕は初めて学級委員になった。行事を計画・実行する上で多数決をとることが多いが、省かれた意見が置き去りにされている気がして、違和感を覚えることがある。そういった少数の意見に耳を傾けることが人権を尊重することなのだ気づいた。個人の思いが埋もれないように、「普通」や「当たり前」に左右されず、常識に捉われない、柔軟な考え方ができる大人になりたいと思う。



優秀賞

本当のバリアフリー

長岡市立堤岡中学校

三年 田中力斗

私は、何度も数え切れない程、困難に直面してきました。それは四年前から車椅子を使用しているからです。私自身、筋肉の病気の影響で車椅子が欠かせない日常生活となり、もはや相棒ともいえます。

そんな私が今まで経験し一番印象に残っている事があります。

私の父がタイへ単身赴任をしていて、昨年の夏休みに会いに行った時の事です。車椅子を使用してからは初めてとなる海外旅行

に「車椅子でも本当に楽しめるのだろうか」「久しぶりに父と会えるのはワクワクするな」と不安と期待でいっぱいでした。しかしそんな心配は杞憂でした。私の想像を遥かに超える今までにない経験でした。タイは設備の上では決して整っているとは言えませんが、初対面・障害の有無・人種関係なく明るく声を掛けたり、障害者や妊婦の方など温かい視線を送ってくれます。実際に母と二人で街の中を歩いていて、高い段差を越えられず困っていた時、現地の方達が自然と集まって来て手伝って下さいました。まさに「微笑みの国」を象徴しています。その経験をして、私の心は感謝と感激に満ちあふれたと同時に「私自身がその立場だったら、何の躊躇もなく、行動を起こせたのだろうか」と考えさせられる場面でした。

私自身も普段の生活の中で困っている人がいても、「本当に手伝って上げて良いのか

な」「かえって迷惑や足手まといになってしまふのかな」と遠慮してしまいます。そんな中、言葉も通じない異国人の車椅子の私を笑顔で手伝ってくれた人達が心に残りました。

日本に帰国してから改めて気付いた事はバリアフリーの形は様々であるという事です。

更にインターネットや公民の教科書を調べていくと、日本では、バリアフリーに向けた法律も近年少しずつ改正されている事が分かりました。例えば、スロープやエレベーター、多機能トイレなどユニバーサルデザインが日本では現在、公共施設以外にも環境面のバリアフリー化の一つとして進んでいます。

一方タイでは、仏教を信じる人が多く、「徳を積む行為をする事で来世が良くなる」という教えなどから思いやりとして、手伝いが必要な際に気軽に声を掛けてくれたり、温かく親切であるなどと、心の面でのバリアフリーが進んでいるという事が学べました。

国柄や国民性から心の面でのバリアフリーは日本は世界の中で決して進んでいるとは言えません。だからこそ更に今よりも沢山の人の心の面でのバリアフリーが浸透される事で今よりもハートフルな社会になっていくと思います。

これからも私自身も含め皆が沢山の人と関わっていきます。困難に立ち向かったり、困難に遭っている人を見かけるかも知れませんが、そんな時はお互いを理解・感謝する事が大切です。「バリアフリーは『障害のある人だけのもの』ではありません、『皆のためにある』ものです。」

これが本当のバリアフリーだと私は心から伝えたいです。



優秀賞

誰を優先すべきなのか

上越市立柿崎中学校

三年 小林 未波

皆さんは、困っている人がいた時、見て見ぬ振りをしたり、誰かがやってくれるだろうと見過ごした経験はありませんか。

ある日、私が電車を利用していている時でした。その日は、夕方だったこともあり会社や学校から下校、退社する人により多くの人が電車を利用していました。そんなときに、一人の高齢者の方が電車の中に入ってきました。彼は、つえをついていました。吊り革にしっかりと掴まって立っていられるほど、足腰

は良くなかったのでしょうか。ですが、どこも満席で座れる席はありませんでした。彼は優先席に向かいました。そこには、十代から二十代の方が座っていました。特に障害を抱えている様子はなく、スマホを操作していたり、外の風景をぼーっと見つめていました。高齢者の方が、優先席に近づいてくるのを見た途端に寝たふりをしたり、下を向き一生懸命にスマホを操作し出しました。まるで、私には声をかけるなど言っているようでした。高齢者の方は、残念そうに下を向きそのまま、電車の揺れに負けないような掴まれる所を探しにその場を離れていきました。私は、吊り革に掴まり電車に揺れながら、その場面を見ていました。私は若者達が急に寝たふりなどをする姿に、苛立ちを覚えました。優先席に座っていないながらも、本当に優先するべき人を優先せずに、自分の気持ちを優先する、そんな社会になってしまったことがとても悲

しいです。優先席を利用するべき人が利用できていない、高齢者の方のような人は、はたして人権が守られていると言えるのでしょうか。この経験を通して、私は人権を守るための、バリアフリーについて調べました。

まず、バリアフリーとは、多様な人が社会に参加する上で生活の中で不便と感じること、様々な活動をしようとするときに障壁になっっているバリアをなくすることです。

私たちが暮らす社会には多様な人々がいます。外見や性格、価値観、能力も人それぞれ違います。そして、年齢や性別、国籍、育った環境なども様々です。

このように、多様な人がいるにもかかわらず、多数を占める人に合わせた社会がつけられてきました。多数を占める人にとっては、不便でもなんでもないことが、少数の人たちにとっては、不便さや困難さを生むバリアとして存在しています。では、バリアとは、ど

のようなものがあるのでしょうか。

この社会では、障害のない人が多数を占めています。そのため、これまでは障害のない人に合わせた社会がつけられており、障害のある人にとっては、生活しにくい環境があり、困りごとを生むバリアとなっています。

しかし、このようなバリアは、障害がある人や高齢者などの多様な人がいることを考え、その人たちも生きやすい社会に変えることで解消することができると私は考えます。

例えば、身体障害がある人や、車いすを利用する人にとっては、階段や段差があると乗り越えることが難しいと感じるでしょう。私も、足を怪我した際に車いすを利用したことがあります。地面が少し荒れているだけでも車いすを動かすことが難しく、時間がかかりました。このようなバリアをなくすためには、通路や出入り口などを、十分な幅を持ったスロープに変えることで、バリアを一つ解

消することができません。他にも、電車内にある優先席や多目的トイレ、車いすを利用している人や身体に障がいを持っている人が利用するための駐車場などが身近にあるバリアフリーです。皆さんも一度は、見たことがあると思います。少しずつ、日本は誰にとっても利用しやすい社会を目指して、バリアフリー化を進めています。

しかし、バリアフリー化を進めても、私たちが壊していることもあります。例えば、視覚障害者の方は、点字ブロックを利用することがあります。ですが、その上に立ち止まって話していたり、自転車や物が置いてあると点字ブロックを利用できません。他にも、優先席を必要としている人に席を譲らないなどもあります。

このように、誰もが不便を感じるのではなく生活しやすい社会をつくるためには、もっとバリアフリー化を進めることが大切です。

そして、バリアフリーを壊さないように、一人一人が多様な人のことを思いやる、心のバリアフリーも大切です。

私は、これからの社会に大切なことは、心のバリアフリーだと考えます。まず、バリアフリーを教育に取り入れることで、私たちの生活も思いやる生活に変わるでしょう。お互いが思いやりの心を持てば、過ごしやすい社会にきつと、なるでしょう。困っている人を見て見ぬ振りをする姿を見なくなる社会にしていきたいものです。



令和6年度 全国中学生人権作文コンテスト 新潟県大会入賞作品

応募総数 県内184校 8,515編

賞	学校名	学年	氏名	題名
新潟地方方法務局長賞	せきかわそんりつせきかわちゅうがっこう 関川村立関川中学校	3年	さとうもえか 佐藤 萌加	「共に生きる」
新潟県人権擁護 委員連合会会長賞	にいがたけんりつさどちゅうとうきょういっくがっこう 新潟県立佐渡中等教育学校	3年	なかむらここ 中村 虹湖	言葉の力
新潟県教育委員会 教育長賞	さんじょうしりつだいさんちゅうがっこう 三条市立第三中学校	2年	しみず 清水あすか	障がいは十人十色
新潟日報社賞	にいがたしりつひがしにいがたちゅうがっこう 新潟市立東新潟中学校	3年	しがあんじゅ 志賀 杏樹	「楽しい」は平等である
NHK新潟放送 局長賞	にいがたしりつつかめだにしちゅうがっこう 新潟市立亀田西中学校	1年	なかばやしゆうき 中林 祐希	誰もが自分らしく
アルビレックス 新潟賞	かもしりつあおいちゅうがっこう 加茂市立葵中学校	2年	あさひまさひろ 朝日 誠大	平等は心の優しさ
優 秀 賞 (以下順不同)	にいがたしりつつくさちゅうがっこう 新潟市立葛塚中学校	3年	いのつめゆずき 猪爪 柚希	差別への意識
優 秀 賞	にいがたしりつおおがたちゅうがっこう 新潟市立大形中学校	2年	はせがわこうき 長谷川 煌樹	望みを叶えるために
優 秀 賞	ながおかしりつつみおかちゅうがっこう 長岡市立堤岡中学校	3年	たなかりきと 田中 力斗	本当のバリアフリー
優 秀 賞	じょうえつしりつつかさききちゅうがっこう 上越市立柿崎中学校	3年	こばやしみなみ 小林 未波	誰を優先すべきなのか
優 良 賞 (以下順不同)	にいがたしりつみやうらちゅうがっこう 新潟市立宮浦中学校	2年	たかほしりお 高橋 凜桜	本当のバリアフリー社会
優 良 賞	みつげしりつみなみちゅうがっこう 見附市立南中学校	3年	なんばきほ 南波 希宝	父との新たな絆
優 良 賞			非 公 表	私の「自分」
優 良 賞	ながおかしりつとうほくちゅうがっこう 長岡市立東北中学校	2年	やぎみりあ 八木美莉彩	自分事
優 良 賞	つばめしりつよしだちゅうがっこう 燕市立吉田中学校	3年	むかいりこ 向井 理湖	正しい護り方
優 良 賞	かしわざきしりつだいちちゅうがっこう 柏崎市立第五中学校	3年	かねこゆきの 金子友希乃	障がい者に優しい社会へ
優 良 賞	かしわざきしりつだいちちゅうがっこう 柏崎市立第五中学校	3年	まさかねまよ 政 金 茉 耶	みんなの「色」の存在
優 良 賞	かしわざきしりつだいにちゅうがっこう 柏崎市立第二中学校	3年	とみたありさ 富田 有沙	理解することの重要性
優 良 賞	しばたしりつしろうんじちゅうがっこう 新発田市立紫雲寺中学校		非 公 表	言葉のじゅう
優 良 賞	しばたしりつだいちちゅうがっこう 新発田市立第一中学校	3年	しまいせい 島井 星華	不登校になった私の過去と今

賞	学校名	学年	氏名	題名
優良賞	たいないしりつなかじょうちゅうがっこう 胎内市立中条中学校	3年	そが 曾我ひなた	自分ができること
優良賞	にいがたしりつつきがたちゅうがっこう 新潟市立月潟中学校	3年	たかき かほ 高木果歩	広い視野で考えること
優良賞	にいがたしりつつきがたちゅうがっこう 新潟市立月潟中学校	3年	なかじょう あいら 中条愛夢	言葉の恐怖
優良賞	にいがたしりつこすどちゅうがっこう 新潟市立小須戸中学校	非公表		私が伝えたい『性』のこと
優良賞	にいがたしりつにいつだいにちゅうがっこう 新潟市立新津第二中学校	3年	やまもと みずほ 山本瑞穂	『人生のやり直し』を認め
優良賞	とおかまちしりつげじょうちゅうがっこう 十日町市立下条中学校	3年	みずおち こう 水落航	自分の第一印象
優良賞	非公表			言葉の力
優良賞	にいがたけんりつつなんちゅうとうきょういがっこう 新潟県立津南中等教育学校	2年	やまざき ゆず は 山崎柚羽	少数意見
優良賞	せきかわそんりつせきかわちゅうがっこう 関川村立関川中学校	3年	わたなべ こあ 渡邊心温	大切な存在
優良賞	むらかみしりつむらかみだいいちちゅうがっこう 村上市立村上第一中学校	3年	さとう 佐藤りおん	守りたい命
優良賞	いといがわりしりつといがわひがしちゅうがっこう 糸魚川市立糸魚川東中学校	2年	おかた しゅうや 岡田 柁也	能登半島沖地震で 経験した優しさ
優良賞	いといがわりしりつといがわちゅうがっこう 糸魚川市立糸魚川中学校	3年	たかさわ か のん 高澤華音	「個性」を認め合える社会に
優良賞	じょうえつしりつじょうほくちゅうがっこう 上越市立城北中学校	3年	せきがわ ゆあ 関川結愛	私の病気は「障害」 なのか「個性」なのか
優良賞	じょうえつしりつよしかわちゅうがっこう 上越市立吉川中学校	3年	おだ しゅんたろう 小田峻太郎	時が止まっても 待ってほしい
優良賞	さどしりつたかちちゅうがっこう 佐渡市立高千中学校	3年	いしづか はるひ 石塚暖陽	私は私を生きていく
優良賞	さどしりつまつがさきちゅうがっこう 佐渡市立松ヶ崎中学校	3年	さいとう ゆいと 齊藤結翔	偏見の恐ろしさ
優良賞	うおぬましりつほりのうちちゅうがっこう 魚沼市立堀之内中学校	2年	なみかた はるか 波方 遥	「ちがう」は「個性」
優良賞	うおぬましりつほりのうちちゅうがっこう 魚沼市立堀之内中学校	2年	ほり ゆめか 堀 夢叶	生きやすい社会のために
優良賞	みなみうおぬましりつやまとちゅうがっこう 南魚沼市立大和中学校	3年	かね まきにこ 印牧虹湖	優しさがもたらす力

令和6年度 全国中学生人権作文コンテスト 新潟県大会 応募作品内容別内訳調べ

		作 品 の 内 容	作品数	割合(%)
1		女性の人権に関するもの	129	1.5
2	こどもの人権関連	いじめに関するもの	(1,812)	(21.3)
		児童虐待に関するもの	(96)	(1.1)
		上記以外のこどもの人権に関するもの	(374)	(4.4)
		こども人権関連 小計	2,282	26.8
3		高齢者の人権に関するもの	122	1.4
4		障がい者の人権に関するもの	475	5.6
5		部落差別（同和問題）に関するもの	75	0.9
6		外国人の人権に関するもの	425	5.0
7	感染症関連	新型コロナウイルス感染症に関するもの	(50)	(0.6)
		その他の感染症（HIV・ハンセン病等）に関するもの	(19)	(0.2)
		感染症関連 小計	69	0.8
8		インターネットによる人権侵害に関するもの	1,065	12.5
9		拉致問題に関するもの	47	0.6
10		性的マイノリティに関するもの	508	6.0
11		戦争や平和に関するもの	326	3.8
12		環境問題に関するもの	67	0.8
13		上記（1～12）以外の人権に関するもの	2,925	34.4
総 計			8,515	100.0

(注) 複数のテーマを内容としたものについては、主たるテーマを計上した。

【審査員・後援】

〈新潟県大会審査員〉

(敬称略、順不同)

新潟県教育庁義務教育課指導主事	五十嵐健太
新潟日報社編集局報道部第二部長	前田 有樹
日本放送協会新潟放送局 コンテンツセンター・センター長	篠田 憲男
株式会社アルビレックス新潟 経営管理本部総務部部長	津野 謙一
新潟地方法務局長	横井 秀行
新潟県人権擁護委員連合会会長	山崎 光子
三条人権擁護委員協議会人権擁護委員	島田 聖一
村上人権擁護委員協議会人権擁護委員	加藤 正志
十日町人権擁護委員協議会人権擁護委員	小林 幸枝

〈後援〉

新潟県教育委員会、新潟日報社、毎日新聞新潟支局、
読売新聞新潟支局、朝日新聞新潟総局、NHK 新潟放送局、
BSN 新潟放送、NST 新潟総合テレビ、TeNY テレビ新潟、
UX 新潟テレビ 21、FM 新潟 77.5、株式会社アルビレックス新潟、
オイシックス新潟アルビレックス BC



人権擁護活動
シンボルマーク

このシンボルマークには、『人権』はすべての人が生まれながらに持っているものであり、世界中の人々の『人権』が最優先に尊重され、共存し合っていかなければならないという願いがこめられています。

新潟地方法務局・各支局連絡先

庁名	住所	電話
新潟地方法務局	〒951-8504 新潟市中央区西大畑町5191	025-222-1563
新津支局	〒956-0031 新潟市秋葉区新津4463-1	0250-22-0547
三条支局	〒955-0081 三条市東裏館2丁目22-3	0256-33-1375
新発田支局	〒957-8503 新発田市新富町1丁目1-20	0254-24-7102
村上支局	〒958-0835 村上市二之町4-16	0254-53-2390
長岡支局	〒940-0082 長岡市千歳1丁目3-91	0258-33-6901
十日町支局	〒948-0083 十日町市本町1丁目上1-18	025-752-2575
柏崎支局	〒945-8501 柏崎市田中26-23	0257-23-5226
南魚沼支局	〒949-6608 南魚沼市美佐島61-9	025-772-2164
上越支局	〒943-0805 上越市木田2丁目15-7	025-525-4133
糸魚川支局	〒941-0058 糸魚川市寺町2丁目8-30	025-552-0356
佐渡支局	〒952-1561 佐渡市相川三町目新浜町3-3	0259-74-3787

お知らせ

※ 本作品集の作品を地方自治体が広報紙に掲載したり、学校が教材に使用される場合などには、下記にご連絡ください。

〒951-8504 新潟市中央区西大畑町 5191 番地
新潟地方法務局人権擁護課
TEL 025-222-1563・1564

法務局では人権擁護委員、人権啓発活動ネットワーク協議会とともに様々な人権啓発活動を実施しています。主な活動は「<https://houmukyoku.moj.go.jp/niigata/keihatsu>」に掲載していますので、ぜひご覧ください。





気づいてね！ あなたが一人じゃないことに！

●電話で相談

子どもの人権110番

フリーダイヤル 0120-007-110

電話料金はかからないよ、(無料)
携帯・スマホからもかけられるよ。

相談時間 月～金曜 8時～15時
土・日曜、祝日、平日の夜間等は
留守番電話です。

●手紙で相談

子どもの人権 SOSモニター

書いたこと、困ったことなどを書いて送ってね



●メールで相談

子どもの人権 SOS-eメール

法務省のHPでも相談を受け付けています。
<https://www.jinken.go.jp/kodomo>

右のQRコードを携帯電話で
読み込めば、HPにつなげます。



子どもじんけんメール

●LINEで相談

LINEじんけん相談

左打ち追加はこちらから

@linejinkensudan



私たち人権擁護委員はあなたの力になります!!
私たちはあなたのサポーターです!!



にいがた じんけん 子どもの人権だより

50号
2024.9.2



新潟県庁法務局・新潟県人権擁護委員会・新潟県人権擁護委員会子ども人権委員会/新潟市中央区西大町5191番地 電話 025(222)1564 FAX 025(226)0963